

佳作

テーマ：誰かのために、わたしが出来ること 「心に寄り添って生きる」

福岡県・明治学園高等学校1年 渡邊 倫子

「倫子ちゃん、トイレは済んだかね」「車の中で喉が渇くやろ。お茶持っていき」「寒かったら困るやろ。ひざ掛け持って帰り」。私の祖父は、世話好きでおしゃべり好き。車で一時間くらいしか離れていないのに、祖父の家へ遊びに行くと、次々と嬉しそうに私達孫の世話を焼いてくれる。あまりに勢いよくしゃべるので、誰も「いや、いいよ」と、断れないくらいだ。さすがに中学生になると、トイレの世話まで焼いてくれる祖父が、少々重たくなってきた。

「おじいちゃん、もうトイレの心配までせんでいいよ。倫子、もう中学生よ」

そう返した時の、祖父のどこか寂し気な笑顔が、今でも昨日のこのように浮かんでくる。

「えっ、おじいちゃんが…」。三年前、祖父は自宅の階段から重たい荷物を持ったまま転げ落ち、頭を強打する事故にあった。頭を数十針も縫う大怪我を負い、二ヶ月間近く入院し、すっかり足腰が弱くなって歩けなくなった。何よりも、すっかり変わってしまったのは、あのおしゃべり好きな祖父がほとんど話さず、笑顔を見せなくなったことだ。

事故がきっかけで、アルツハイマーの症状が出始めた祖父は、皆の会話にも入ってこなくなった。心配した父は、祖父を家族旅行に誘った。何か、良いきっかけになれば、という一心で、行きたくないと思える祖父を孫四人がかりで説得した。楽しいはずの、孫と一緒に温泉旅行。しかし、祖父はじっと黙りこくったままだった。帰宅後、祖父の様子が心配で電話をかけた私は、言葉を失った。

「おじいちゃんね、何を食べたかも、どこへ行ったかも、わからんらしいのよ」

祖母の言葉に、私は心底がっかりした。せつかく皆が心配して、一生懸命誘ったのに…。

「おじいちゃん、話ができないだけで、本当は楽しかったんじゃないかなあ。ほら、花畑でお弁当を食べた時、私達孫の横に寝ころがって、黙って笑っていたじゃない」

姉が言った言葉に、私ははっとした。あの時、確かに祖父は、私達四人がおにぎりをほおばる姿を、溶けてしまいそうに優しい笑顔で嬉しそうに眺めていた。あの笑顔が見られただけで、もう十分だったのに、私は一体なぜ、何にこんなにもがっかりしていたのだろう。このことがきっかけで、私は祖父が事故にあつてからのことを深く考えるようになった。歩けなくなったこと。歩くスピードや行動が遅くなったこと。耳が遠くなったこと。話を通じなくなってきたこと。考えてみると、私達は祖父を心配するあまり、出来なくなったことや失ったことばかりを意識しすぎていた気がする。そして、あの花畑での祖父のやわらかな笑顔のように、何か大切なものをたくさん見落としていた気がするのだ。

大好きな祖父の心は、別に言葉にならなくても、私達家族に伝わってくる。祖父のために私が出来ることが、祖父の心に寄り添い、感じとることなのだと思う。まだ出来ることや出来るようになったことを見つけて共に喜び、小さな発見を積み重ねていくことで、私はこれからも祖父の心に寄り添っていきたい。私は、将来医師になりたいと思っている。そして、医師として患者さんと接する時、常に自分に問い続けたい。相手の心に寄り添い、相手の心を感じるとる医師に一步でも近づいているか、成長できているかと。